

# 『オリンピックと国際社会』

「オリンピックをスポーツの視点から」

大館秀雄

## 序論

著者は時期パラリンピックを目指して車椅子バスケットボールの練習に日々励んでいる。スポーツの意義、あり方については日々考えているといっても過言ではない。最近オリンピックには、プロスポーツマンの参加が認められ、スポーツとしての結果に対する公平性が議論されている。また、依然として消えることのない薬物や、危険な手法によるドーピングによる公平性、危険性が話題となっている。これらについてスポーツ競技に参加する者の一員として、100年以上伝統と歴史のある国際大会としての対応について検討したい。

## 本論

オリンピックは近代オリンピックとも言われている。なぜだろうか。これは西暦紀元前 776 年柄と始まったとされている古代オリンピックがあったからである。古代オリンピックは、約 1200 年もの間、ローマ帝国のテオドシウス大帝が禁止するまで開催され続けられた「宗教的祭典」であった。またこの頃の大会は神々にささげるためのものであったため、大会の優勝者に対しても月桂樹の枝で作られた冠が与えられるのみであった。オリンピックの優勝者は、オリンピック優勝者という名誉のみのために戦っていると言えた。このことから、この時代の古代オリンピック大会には、現代のオリンピック委員会などの言う「アマチュア」「プロフェッショナル」という考え方、自体がなく参加者が皆アマチュアであった、と言える。

周知のように、近代オリンピックはフランスのクーベルタンによって提唱されスポーツの国際的祭典として 1896 年第 1 回大の大会を迎えた。

「第 1 回近代オリンピック大会開催の時に参加資格としてアマチュアリズムを提唱した。古代オリンピック哲学と英国流アマチュアリズムの二つを合わせてオリンピックの中心的な理念としたであろう<sup>1</sup>。」

## 第 1 章 オリンピックの基本理念

「オリンピックの基本理念<sup>2</sup>」を記す

スポーツの基礎を為す肉体的及び道徳的資質の発達を促進すること  
スポーツを通じてより良き相互理解と友好の精神により若人を教育し、それによってより良い、より平和な世界の建設に協力すること

---

<sup>1</sup> 清川正二『オリンピックとアマチュアリズム』(株)ベースボール・マガジン社 1986 年、p42

<sup>2</sup> 前注 1、p31

全世界に「オリンピック理念」をひろめ、それによって国際的親善を創り出すこと  
世界の競技者を4年に一度のスポーツの大祭典であるオリンピック大会に参集させること

近代オリンピックが始まったばかりの時点では、英国的なアマチュアという考え方が大事にされているが、上述の基本理念の中には、この時点で「アマチュア」に関する事は書かれてはいない。

そののち1924年版の憲章内の総則第一章に「IOCの基本理念」を挙げ、第一条に「オリンピック大会はアマチュアの競技者をすべて公平に参加させなければならない」とし、その1章に「アマチュア定義」が書かれている。

#### 1938年オリンピック憲章

この年の憲章の第4章に「オリンピック大会開催要綱」がその中に「アマチュア定義」が規定されている。次にそれに基づきアマチュア定義を記すこととする。

### 第2章 「アマチュア定義<sup>3</sup>」について

- 1) 各種スポーツの国際スポーツ連盟の「アマチュア定義」によりアマチュアと認定されたものはオリンピック大会に参加を許可される。

オリンピック・プログラムのスポーツでありながら、それを統轄する国際スポーツ連盟がない場合には、ICOの了承を得たうえで、組織委員会が決定権をもつ(以下略)

- 2) オリンピック大会に参加する競技者は次の条件を満たすものでなければならない。

競技者は申し込まんとするスポーツ、または他のいかなるスポーツにおいても、プロフェッショナルであってはならない。

大会参加のために失われた給料の払い戻しや補償を受けてはならない。ただし競技者が生活の責任を持つ世帯主である場合、雇用主がその妻または父母に金銭保証をすることは除外する。

体育授業または、スポーツを専門に指導することで収入を得ている学校教師は参加資格がない。

としている。

この定義の内容から、プロフェッショナルの参加はできないとされている。

「プロフェッショナル<sup>4</sup>」は、プロと省略されており、一般的には職業として行われるスポーツを指し、アマチュアスポーツの対義語である。野球、相撲、ゴルフ、ボクシング、サッカー、ヨーロッパではテニス、自転車、アメリカではアメリカン・フットボール、バ

---

<sup>3</sup> 清川正二『オリンピックとアマチュアリズム』(株)ベースボール・マガジン社、1986年、p.124

<sup>4</sup> <http://kotobank.jp/>

スケートボール、アイスホッケーなどの例をあげることができる。

「アマチュア<sup>5</sup>」とはアマと略されて言われる時もあるが、スポーツなどにおいて、職業としてではなく、趣味として愛好する人。愛好家。素人のことをさす。

「セミプロフェッショナル<sup>6</sup>」は、アスリートで例えば企業での仕事は午前中のみで切り上げ、午後はスポーツに打ち込める環境で練習している選手、または、他の職業に就いてはいるがプロ並みの実力を持っている選手、プロ選手として従事してはいないが、それに準ずるレベルでかかわっている選手の事を言う。

プロスポーツ選手の参加が出来ないオリンピックで、プロの規定とアマチュアの規定の間を縫って行くような、ステート・アマチュアと呼ばれる選手を派遣し出す。これは主に東西冷戦などの、東側の共産主義の国に多くみられ、スポーツにより収入を得ることはないが、国から身分の保障、物理的な支援をうけスポーツに専念する事の出来る環境を整えられている者が、オリンピックで活躍し大量のメダルを獲得した。これは、プロと叫ばれていないが、実質的にはプロと変わらない環境でスポーツに取り組んでいた。これは、オリンピックの開催年別、メダル数でも分かる。プロスポーツ化が文化として盛んになっていきプロフェッショナルとアマチュアが2分されていく国と、プロスポーツ化は文化的に行われず、ステート・アマとしてオリンピックに参加する国での、オリンピックの公平性は保たれていなかったと言える。

#### 1973年オリンピック憲章

「1971年にも憲章は改行されているが「アマチュア規定」に関しては1967年版のものとは変化はない。ところが1973年、当時IOC会長キラニンは、決議に基づきオリンピック憲章を大きく改定して憲章の内容から「アマチュア競技者 Amateur Athlete」あるいは「アマチュアリズム Amateurism」の語を一切消去した。

たとえば、1971年版の「総則第1章、根本原則」の第一条に「オリンピック大会は全世界のアマチュア競技者を集めて公平な協議を行う They assemble Amateurs of all nations in fair and equal competition」とあったのを「オリンピック競技者 Olympic competitors」と書き換えた。また、オリンピック参加資格を規定する第26条に関しては、1971年版では、「上記の条件を満たす者はオリンピックの立場からいってアマチュアとみなされる」とある条項が、1974年版の憲章では削除されている<sup>7</sup>。

1896年第1回近代オリンピック大会から約70年もの間、アマチュアで無い選手、プロフェッショナルの参加を認めなかったオリンピックが、5代IOC会長ブランデー(1952~1972)から、6代会長キラニンに代わると、今までも問題になっていながら、変わる事のなかったアマチュア規定、ルールについての改革があったと言える。それにより、国際オ

<sup>5</sup> <http://kotobank.jp/>

<sup>6</sup> 前注5

<sup>7</sup> 清川正二『オリンピックとアマチュアリズム』(株)ベースボールマガジン社、1986年 p.135

オリンピック委員会は、参加資格が、オリンピック大会の種目ごとの国際競技連盟のあげている参加資格規定に即したものになる。ただし、各自が統括するスポーツの競技規則の確立、スポーツの競技者の「アマチュア定義」を制定し、定期的にその実際の実情に合わすようにその定義を変更すること。としたこのことから、種目により完全にプロフェッショナルの参加しない種目と、年齢制限を持つ種目、など種目ごといろいろな形態をもつようになる。この後の1992年のバルセロナ・オリンピック大会にアメリカが派遣したバスケットボールチームは、NBAプロバスケットボール選手が参加した。このことから時代の流れからくる、スポーツに対する人類の感覚の変化に国際オリンピック委員会が対応し、その時代に合った、かつ公平なスポーツの祭典にするべく動いているのが分かる。

### 第3章 スポーツとドーピング

スポーツを娯楽としてアマチュアのみ、名誉の大会として進めてきた、オリンピックから、ステート・アマの参加や、過度な結果主義による、ドーピングという手法に手を出す選手が現れる。選手のみならず、医療関係者、国、科学者もかかわっている。

「1952年オスロ冬季オリンピックのスピードスケート選手更衣室内から使用済みのアンプルや、注射器が発見されたことからドーピングという行為に対して動きはじめる、1960年ローマオリンピックにて自転車競技者が競技中に亡くなる<sup>8</sup>。」などの問題から、その後の1968年グルノーブ冬季オリンピックとメキシコ夏季オリンピックから本格的なドーピング検査が始まる。だが、この頃は、まだ「各国際競技連盟が認めているドーピング・コントロール基準がばらばらであったため、オリンピックとして取り締まることが難しかった。この事実から、国際オリンピック委員会1976年までに30以上の禁止薬物のリストアップし、アナボリックステロイドな以下に示すいくつかの群に分類された<sup>9</sup>。」

- ・精神興奮剤           アンフェタミン・コカインなど、疲労を軽減させて耐久力を助ける。
- ・交感神経興奮剤       エフェドリンが最も広範囲に使われている。
- ・中枢神経興奮剤       ストリキーネなど。
- ・麻薬鎮痛剤           ヘロイン。モルヒネなど含有。
  
- ・男性ホルモン製剤    タンパク同化ステロイド
- ・利尿剤                - 尿を増やし、減量・薬物排泄
- ・隠蔽財                - 薬物の存在を隠す
- ・ペプチドホルモンとその同族体 - 成長及びタンパク同化作用をもつ
- ・遮断剤                - 手足の震えを和らげる

<sup>8</sup> ジェフリー・ミラー『オリンピックの内幕』サイマル出版会、1980年 p.110

<sup>9</sup> 前注8、p.111

- ・ 2 遮断財 - タンパク分解を遅らせ、脂肪を燃焼する

次にドーピングがもたらす効果について記す。

- ・ これらの薬物などは治療用で用いる適正量を超えて使う事が多く、多くの副作用を起こす、これは生命にかかわるものもある。
- ・ ステロイドの使用による、女性の男性化、男性の女性化、男女問わず動脈硬化などがある<sup>10</sup>。

「1977年にフィンランドの円盤投げ選手マルック・ツオッキが、ステロイドの常用を公然と認めヨーロッパカップ決勝大会から除外されたが、67,06m は記録を使わない限り出せないフィンランド記録だと言っている<sup>11</sup>」。現在のトップ記録は、1986年 74m08 ユルゲン・シュルト 東ドイツによる記録である。

「1976年モントリオール・オリンピックのパンフレット中で、医事委員会こう述べている「スポーツの競技は、選手をモルモットとして利用する薬理学者と医者との競技にはならない」また、ミュウヘンオリンピックで、アメリカ水泳、リック・デーモンは金メダルを取得したが、尿から禁止薬物が検出され返上となった。ぜんそく治療のために必要だったとしている。インスブルック冬季オリンピックのソ連の女子スキー選手は、ビールス性感染にかかっていた時に誤って禁止薬物を飲んだとされている<sup>12</sup>」が、メダル剥奪となっている。「規則にはちゃんとしたルールが定められてあり、禁止薬剤のリストもオリンピック大会の各チームドクターの手元に配布されている。そのうえ、禁止リストにのっていないあらゆる種類の薬も豊富にあるし、治療が必要であればそれらを使用すればいい」として揺るがなかった<sup>13</sup>。この件は、一貫した規則のもとに選手に対応していると考えられ、スポーツに対する公平性をしっかり厳守していると言える。国際オリンピック委員会の揺るぐことないオリンピックのムーブメントに対する答えであると考えられる。これ以前の1960年代では、選手がステロイドを自由に使用し、大会記録を大きく塗り替えてしまうという問題が起こっていた。

#### 円盤投げ歴代記録(ワールドレコード順)

年	記録	名前
1986	74m08	ユンゲル・シュルト
2000	73m88	ウィルギリウス・アクレナ
2006	73m38	ゲルド・カンテル
1983	71m86	ユーリ・ドゥムチェフ

<sup>10</sup>ジェフリー・ミラー 『オリンピック内幕』サイマル出版社、1980年、p.117

<sup>11</sup> 前注 10、p.114

<sup>12</sup> 前注 10、p.112

<sup>13</sup> 前注 10、p.113

現在の、円盤投げの歴代記録でもトップ5には、1980年代の記録保持者が2名入っている、またソ連や、東ドイツの選手の記録である。本人の言うとりドーピングのもたらす効果は大きく、自然な体から出せるものではないといえる。

他の砲丸投げ、やり投げ(旧規格)、円盤投げの大会レコードが、すべて1990年までの選手の記録によるものである。

一方、陸上100mでは1988年にアメリカのベン・ジョンソンがドーピング行為により9秒79という記録をだしたが、それから11年後の1999年になり、アメリカ、モーリス・グリーンが、やっと対記録をだした。この事実が示すように、ドーピング行為を行うのと行わないのとの記録の違いは大きいのである。この記録を超えるジャマイカ、アサファ・パウエルの9秒77が出るまでに6年がかかっている。現在のワールドレコードは、2009年にジャマイカ、ウサイン・ボルトの9秒58である

今日の、競技に対する研究や、食事・栄養環境管理、選手のやる気、金銭、生活環境、などの事情で1990年代を下回ることは考えられない、トラック競技などでは、2000年代の記録などがワールドレコードとなっている。また1977年円盤投げ選手のステロイドの常用に関する発言もあり、人間の限界なのか？普通の体では出せない記録なのか？と疑問がある。

#### アンチ・ドーピング機構の発足

「1960年代から国際オリンピック委員会が中心になって行ってきたが、アンチ・ドーピング活動は独立した組織が中立の立場で行うべきであり、また、スポーツ界が一致して取り組むだけでなく社会全体が取り組む問題であることから、国際オリンピック委員会と各国政府の協力によって1990年に世界アンチ・ドーピング機構(WADDA)が設立された<sup>14</sup>。」

2003年3月に、国際的に共通ですべての競技に適用されるアンチ・ドーピング規定が採択され活動の基本原則が完成した。次にドーピング検査による実績を示す。

#### ドーピング検査実績

夏季		検査数	陽性数	冬季		検査数	陽性数
1969	メキシコ	667	1	1968	グレノーブル	86	0
1972	ミュンヘン	2079	7	1972	札幌	211	1
1976	モントリオール	789	11	1976	インスブルック	39	2
1980	モスクワ	645	0	1980	レークプラシッド	440	0
1984	ロサンゼルス	1507	12	1984	サラエボ	424	1
1988	ソウル	1598	10	1988	カルガリー	492	1
1992	バルセロナ	1848	5	1992	アルペールビル	522	0

<sup>14</sup> <http://www.joc.or.jp/about/>

1996	アトランタ	1923	2	1994	リレハンメル	529	0
2000	シドニー	2359	11	1998	長野	621	0
2004	アテネ	3667	26	2002	ソルトレークシティ	700	7

上記表が示すように、ドーピング検査の実績から見てこの現実は、いかなる差別を伴うことなく、友情、連帯、フェアプレイの精神を持って相互理解しあうオリンピック精神に基づいて行われるスポーツを通じて青少年育成することによって、平和でよりよい世界をつくることに貢献することである、という「オリンピックの精神、ムーブメント」から離れ、大会での目的がよい記録、よい結果をだすことに向かっていることだと考える。

結果に最大の価値を求めてしまいがちになるのには、スポーツマンとしての自己の新記録に対するもの、放送メディアの力、国家的な力、今後の活動に関係する問題などによる内的要因はもちろんのこと、外的要因による影響は大きい。

#### 第4章 結論

このテーマで、筆者はオリンピック各競技の国際スポーツ連盟の出している、オリンピック選手参加規定にのっとり、ルールに従いプロが参加することは賛成である。今日のスポーツは様々なスポーツにプロリーグが存在している。プロリーグには、トップアスリートと呼ばれるものが存在し、そのスポーツの競技人口、競技知名度、競技技術を、引っ張り発展させる力がある、また、トップアスリートの活躍により若者に対して良い影響を与えるであろう。こういったアスリートは、プロフェッショナルに限らず、アマチュア内にも存在する、このことから、各競技の国際スポーツ連盟の規約に違反しない形で、プロフェッショナル、アマチュア共に、トップアスリートは参加すべきと考える。

参加者には、ムーブメントに書かれていることに忠実に従うこと、オリンピック大会が、スポーツの祭典であり、決して、商売ではないのだという自覚を持つことが必要であろう。さらに IOC、マスコミもオリンピックは商売でないということを各国のアスリート発信し続けることが必要であると考え。これはまた、国際スポーツ連盟、国内スポーツ連盟、出場選手にとっても最も重要な事であると同時にオリンピックのさらなる発展の為に今後の国際社会の対応に期待するものである。

#### 参考文献

- ・清川正二『オリンピックとアマチュアリズム』(株)ベースボール・マガジン社、1986年
- ・ジェフリー・ミラー『オリンピックの内幕』サイマル出版会、1980年



・鴨門義夫『アテネ五輪から見た日本スポーツの未来』(株)創文企画 2004 年

キーワード

- ・アマチュア
- ・プロフェッショナル
- ・ステート・アマ
- ・セミプロ
- ・ドーピング
- ・アンチ・ドーピング
- ・国際オリンピック委員会
- ・国際スポーツ連盟
- ・国内オリンピック委員会
- ・国内スポーツ連盟
- ・スポーツの祭典

## 要約

オリンピックを、スポーツという視点から見て、最近ではプロスポーツ選手の出場が珍しくない、このことでスポーツとして結果、記録の公平性が問題になるのでは、また、消えることのないドーピング問題について長い歴史の中での対応、解決策について考える。

オリンピックは、古代オリンピックと、近代オリンピックがある。近代オリンピックは古代オリンピックと英国風アマチュアリズムを参考に作り出したものであり、この二つは異なるものである。

近代オリンピックは、当初アマチュアリズムを大事にしたが、戦争や、時代の流れに対応し今日のかたちをつくった。また国際大会として記録、国の威信、などの純粋なスポーツの祭典としてのかたちから外れて参加する者もあらわれ、医療、科学技術の進歩に伴いドーピングという問題がでてくる。オリンピック委員会は、「精神・ムーブメント」を柱とし対応していく。

著者は、プロフェッショナルのオリンピック参加に賛成である。プロアスリートの参加から、競技の質の向上、若者の興味、関心、などが大きくなると考えるからだ。だがスポーツの祭典として関わる者が皆オリンピックを、商売の対象にしてはならない。オリンピックの発展は、メディアや、国際社会との対応に期待する。